

D-13 児童学実践者養成に関する研究—その2(個別論)

東京家政学院大家政 ○小西百合子 鈴木百合子 吉川晴美

目的 関係弁証法に基づいて、人間形成に関する一研究として、児童学実践者の養成の個別的な研究とすすめる。日常生活場面での自己のふるまひ方を、役割関係において明確化すると共に、児童学実践者の養成活動に参加して、活動内容における児童学実践者の役割変化体験の過程を分析し明確化する。

方法 行爲法—心理劇による方法で研究とすすめる。

①行爲法—心理劇の特色として①日常生活場面を生活縮図的に用意し、そこにおける関係を科学的に解明する。②今、ここで、新しく、ふるまうことが重要視される。③自覚的、創造的にふるまうことのできる人格形成がめざされる。④対人関係を発展させるという体験をとおして日常生活を発展させる態度と養成する。⑤演出に必要なものは、「監督」、「演者」、「補助自我」、「観客」、「舞台」である。

②関係弁証法に基づいて、役割とは、「自己身体的役割」、「心理行爲的役割」、「対人関係的役割」、「場面構成的役割」、「社会地位的役割」のよつた役割に分けられる。このよつた役割に基づき行爲法—心理劇の過程分析と行なう

結果 行爲法—心理劇による活動内容の分析(導入、展開、発展に分けて)をし、考察とすると、次のような事柄を明らかなにすることが出来る。①役割関係構造が、明確化され、児童学実践活動状況の全体的把握が可能となり、児童学実践者の資質が養成される。②役割行爲によって、役割変化体験が成立し、日常生活状況における役割行爲の可能性が広がる。